

福島の子どもを守る情報発信活動

—イギリスの大学で原発を問う

本 田 貴 文

私たちはなにを求めて

これまで生きてきたのだろうか

あの朝、ケータイの鳴る音で目が覚めた。学長の声が聞こえてきて、授業に行かないで寮の部屋で寝ていたことがバレたかと焦ったが、彼は意外にも「タカ、家族は大丈夫か?」と尋ねてきた。いったい何のことだか分からずに慌ててパソコンを立ち上げたら、どこかのニュースでも「日本で地震と津波により原発が壊滅的な被害」と報道していた。一瞬、日本に帰れないことを覚悟した。ついにこの時が来たのだと悟った。

その日以前の原発の認識という、放射性廃棄物を何万年に及んで管理しなければならず、そんなことは

出来るわけがないのに、電車内のモニターではかわいい小さな女の子を使った広告で「廃棄物は容器に入れて地中で安全に保存できます、国民の生活を明るく支えています」といつているな、という程度のものであった。当然事故のリスクもあるわけだが、国民の関心はほぼ皆無で、大きな事故がくるまで原発をなくすことはできないのだと、無意識のうちにあきらめていた。

事故直後は、日本が壊滅的な状態にあるにもかかわらず、ニュースはチェックしていたが、何もできずに大学の試験に忙しかっていた。試験が終わり、この状況を変えるためにいつたいます何をしなければいけないのかと考えたとき、まず原発について学ぼうと思い、広瀬隆著『原発時限爆弾』という本を読んだ。この時

はじめて、日本最大の利権と、核の歴史、被ばく労働にまつわる大きな構造上の問題があることに気付かされた。そんな中、俳優の山本太郎が所属事務所を退職したニュースを目にし、その彼とともに四月一日の東京・高円寺でのデモに参加したのが「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク（子ども福島ネット）」だったことを知った。現状を変えるためにはここに入らなければいけないのだと思った。

二〇一一年八月、福島行きの新幹線に乗っていた。子ども福島ネットへ電話し、夏休みの間ボランティアに行きたいとお願いした。震災から五カ月が経っていたので、福島にはもつと手慣れたボランティアの人がたくさんいて、私がする仕事などはないのだと追い返されるかもしれないと想像していたら、意外にもボランティアは私一人しかおらず、やらねばならない仕事もたくさんあった。

震災直後はイギリスにいたので知らなかったが、あれほど多く集まっていたボランティアはみな岩手や宮城などの周辺県に行っており、汚染地域にのこのこやって来る学生は私一人だったのである。子ども福島ネットの手伝いを始め、一通りのボランティアを経

験した。汚染されていない野菜を売る八百屋の手伝い、炊き出し、避難支援、食品測定、デモ、そして多くの被災者の人々と出会い話を聞いた。以下は、私の当時のメモからの抜粋である。

汚染されていない野菜を売る八百屋にボランティアにきていたお母さんは「水が飲めなくなつたのが一番悲しい、福島の水はすぐきれいでおいしかったのに」と言っていた。

近所の畑より比較的放射線量の高い野菜を測定所へもつてきた農家の人は「自分たちでは食べないが、生活のために出荷はしている」と言っていた。

北海道に家族を避難させ、農家を続けていたお父さんは、生産している野菜にセシウムが混入していることを認識しているものの、政府の設定する暫定基準値を下回っているために市場へ出荷している。しかし、出荷する際には「うちの野菜には放射能が入っていません、規定値よりは低いです、その危険性についてはわかりません。危ないと思われる方は買わないで下さい」と言っているという。そのことから、震災以降は売り上げが九割減ったそう。その方は、いっそのこと政府に「ここで農家はやってはいけません」と言っ

てもらった方がよっぽど楽だと言っていた」。

震災直後から、山下俊一氏（長崎大学の医学者。事故後、福島県立医科大学副学長。福島県放射線健康リスク管理アドバイザー等を務める）が「放射能の人体における影響を心配する必要はない、マスクをしても無駄だ」と講演し続けたことが原因で、福島市内ではマスクをしている人をほとんど見かけなかった。子どもは特に学校などでマスクを付けたがらないのだそうだ。クラス全員が付けていない中、一人だけマスクをすることは不可能に近く、中には学校の前までは付けていくけれど、入ると外してしまい、また家の前で付けないおして帰ってくる子どももいるのだとか。市民にマスクを付けることを奨励するために、そして、自分自身の健康を守るために、ボランティアのスタッフも徹底してマスクを付けるべきである。

ボランティアのスタッフがマスクを着用するべきだと当時のメモで言及していることについては非常に興味深く、重要なことであると思う。現在でも脱原発のサミットや集会の度に福島県に人が多く集まるが、彼らの多くが、そこが放射線管理区域相当のレベルであり、本来ならば一般の人は立ち入ってはいけない場

所であるということを過少に評価している。タレントやミュージシャンの多くが福島に来て、コンサートなどをマスクも防護もせず行うが、本来ならば、「福島に行きたいけれど、自分の健康が心配なので行けない」というのが正しい態度なのである。そうした厳格な態度によって「今私は他人が来たくない場所に住んでいるのだな」という認識につながり、リスクを直視する生活へと変わってゆく。

そしてやはり、放射能のリスクについての知識が余り無い若者が安易に汚染地へ行くべきではない。被災地ボランティアに行き、「福島大好き」といったキャッチフレーズを掲げ、「瓦礫をさらい、またそれを肴に酒を飲む大学サークル行事の付合いだったら、家で大人しくしておいた方がよいのだとさえ思う。そもそも、行ったこともない福島が好きなのではない。ましてや、何万人もの子どもを放射線管理区域以上の汚染地域に閉じこめ、放射性廃棄物という危険なゴミとなつてしまった農産物を生産し続ける「フクシマ」が私はむしろ嫌いだ。このような場所をあえて「好きだ」と言う人間は感覚が甚だ異常であると言わざるを得ない。同様に、多くの子どもに被ばくを強要しているこの日

本という国にも嫌悪しているが、今嫌いだからといって、未来永劫嫌いになるとは限らず、少しでも自分が好きになるようよい国にしていけばよいのである。

「チェルノブイリハート」という映画の中で多く見られた、生まれてすぐに心臓病を患い、その多くが成人になる前に死んでしまう子どもたち。彼や彼女たちが、それでもウクライナやベラルーシに生まれて良かったと本当に感じるかどうか、今の日本人の多くが無責任にネット上で「つばやく」前によく考えるべきである。

では私はいったいどのように行動するべきだったのか。福島で働き続けた夏休みが終わり、イギリスに帰ろうとしていた頃、子ども福島ネットの情報誌を作ってくれないかと頼まれた。確かにインターネットを通じての編集ならイギリスからも情報の発信ができることに違いはなかった。情報誌には福島弁で野菜を入れる背負い籠を意味する「たんがら」と名付けた。二〇一一年一〇月に創刊した当時はほとんどの人が気にも留めないほど細々と情報を発信していた「たんがら」も、徐々に読者が増え始め、反響が寄せられるようになった。原発事故被災者がほかの地域に移住できる場合の受け入れ自治体の情報、子どもの短期の保養が可

能な場所の情報、体の免疫力を高める料理のレシピ、原発事故に関係する訴訟や行動の情報などを掲載している。

しかし、できるだけ多くの人が「たんがら」を読んでもくれることは手段ではあっても目的ではないことは明白である。「たんがら」の存在が他の多くの情報を発信したいと考えている人を刺激し、「たんがら」のようなメディア媒体がもつとたくさんできることが理想的なのである。そうすることにより、企業にべつたりと癒着し、震災以降から大本営発表を続ける日本の大手メディアが多少なりとも公共の利益となる情報を提供し始めるのである。目先の満足感や充実感ではなく、問題を根本から解決するための行動とはいったい何なのか。そのために私たちには何ができるのか。この質問について考え、自ら答え／応えはじめることこそが、問題を根本から解決するための第一歩なのだと思う。

様々な場所へ行き、様々な人に会う中で次の三つのことに気を付けるようになった。そしてそれは3・11以降さらに強く思うようになった。他人が嫌がることはしない。いじめられるときの気持ちはいじめられた



「たんがら」2012年5・6月号

人間にしかわからない。大切なものの愛おしさは失ったときにしかわからない。これらはイデオロギーでも何でもない、小学生でも解るようなただの一般常識であるが、これを忘れた大人たちが躍起になって子どもたちを守ることは全く逆のことを3・11以降行ってきた。医者が患者の健康を維持しようとせず、ジャーナリストは真実を伝えず、政治家は子どもを避難させず、教師は放射能のリスクを教育せず、親は子どもを守らない。原発の大きな利権から「うまみ」を吸い上げるために形成された基盤のもとで、日本における「しごと」の「目的」と「手段」が反目するという事

態が現在起こっている。責任ある立場にある人間が本来果たすべき仕事を全うせず、仕事における「金を儲けるための条件」という側面が極端に強調されている現在の日本では、「しごと」の概念自体の破壊が進んだと言える。

そしてこの夏、電気会社は十分な電気を供給しようとしないうちにも思えば、一家を賄うだけの電気量など大した量のエネルギーではなかったはずである。ほとんどの電気を自分たちで発電でき、足りない分はエネルギーを節約して暮らせば良かっただけのことはなかった。ところが、私たちは資本主義の法則に従って、迂回生産を続け、巨大な原子力の機構をつくり出した結果、今度は大規模な停電のリスクに脅かされ、さらなる危険を受け容れようとしている。私たちはなにを求めてこれまで生きてきたのだろうか。本当に欲していたものは、慎ましい生活と人間らしく生きる権利。

「子ども福島」のURL <http://kodomo-fukushima.net/> から「たんがら」を閲覧できます。

(ほんだ たかふみ・マンチェスター大学学生、イギリス在住)